

つながる

深まる

育む

北海道・十勝

農村ホームステイ事業 ~食の絆を育む会

《日本の食料基地・十勝について》

「十勝」という地名は、管内を流れる十勝川を指すアイヌ語「トカプチ」が由来とされています。「トカプチ」の語源は「乳」であり、河口が二つの乳房のように並んでいることからつけられました。また十勝川が日高山脈を背景として悠々と流れるその姿は十勝の象徴でもあります。

十勝の開拓は、明治16年(1883)年、晩成社(静岡)による開拓団の帯広への入植に始まりました。以来120年余り、十勝は寒冷な気象条件にありながらも恵まれた土地資源を活かして、近代技術の導入や土地基盤整備を進め、農業を主要産業として栄えてきました。

現在、十勝総合振興局は1市16町2村で構成され、日本最大の食料基地としての役割が期待されています。

また、十勝は北海道の南東部に位置し、面積は岐阜県とほぼ同じ、大阪府の約6倍の広さを有します。



『食の絆を育む会』構成メンバー

- ・うらほろ子ども食のプロジェクト(浦幌町)
- ・グリーン・ツーリズム音更(音更町)
- ・清水町農村ホームステイ協議会(清水町)
- ・新得町農村ホームステイ協議会(新得町)
- ・ちはるの里(足寄町)
- ・本別子ども民泊受け入れの会(本別町)
- ・まくべつ稔りの里(幕別町)
- ・鹿追子ども宿泊体験受入推進会議(鹿追町)
- ・南十勝長期宿泊体験交流協議会(大樹町、広尾、中札内、更別村、幕別町忠類)
- ・めむろ農家民泊研究会(芽室町)
- ・おびひろ農村ホームステイ協議会(帯広市)



製作・発行 〒089-5601 北海道十勝郡浦幌町字宝町 53-26

NPO法人 食の絆を育む会 TEL 015-578-7955 FAX 015-578-7956

http://www.shokuhug.com https://www.facebook.com/shokuhug



web

家族のような温かいつながり
十勝でみんなが一つになる時

農山漁村は、
いのちの糧を育む大事な場所。
でもこの場所が
なかなか身近に感じられない
そんな今だからこそ、
家族のようなふれあいを通じ、
都市住民と農山漁村が
つながることから始めたい。



自給率1100%の
につぼんの食糧基地「十勝」の
おかあさん・おとうさん
おじいちゃん・おばあちゃん
おにいちゃん・おねえちゃん
子どもたち
みんなが待っています！
広大な大地と
いつほいの青空のまよひ。



体験するだけで終わらない 学びへの提案

STEP ①

農村ホームステイ P6-7

体験により
生まれる
つながり

十勝での家族のようなふれあい
様々な体験から
農山漁村がより身近な存在に。

STEP ②

事後学習 P8-9

振り返り
考えることで
深まる学び

生徒みんなで体験を振り返り、
農山漁村の役割・食の大切さを
再考。生きること・社会との
関わりを学んでいきます。

その先に...

育まれる
新たな力

体系的な「実体験+学び」
からの気づきは、確実に
社会を生き抜き、
次代へつなぐための
力を育てていきます。

農村ホームステイから始まる 次代へ向けた生きた学び



NPO「食の絆を育む会」代表
■ 近江正隆 ■

東京都目黒生まれ・都立戸山高卒業。
大自然に憧れ19歳で単身北海道に移住。酪農・畑作・
林業・漁業を経験後、現在は農山漁村が持続する仕組
わりに奔走。農村ホームステイを運営する「食の絆を育
む会」代表に就任。「内閣府地域活性化伝道師」「文科省食
育有識者会議委員」などを務める。本事業では事後学習
などで出張授業などを担当している。

都会と農山漁村がつながる未来へ

ぼくはいまから20数年前に北海道にやってきた。理由は
大自然の中で暮らしたいから。別に農林漁業や農山漁村な
んで興味がなかった。なぜなら親戚も田舎もないぼくには
身近な存在ではなかったし。でも十勝に来て、自然と向
き合い暮らす農家さんや漁師さんたちとふれあい、様々な

体験をして行く中で、考えは大きく変わっていった。そんな
ぼくがいま一番に思うこと。それは、十勝のような農山漁
村が持続しなければ、社会全体もまた存続できないとい
うこと。どんなに偉くなっても、どんなに体を鍛えても、ど
んなに賢くなっても、生きていくためには欠かせないのが、
「空気」「水」そして「食糧」。それらを育むのが十勝のよ
うな農山漁村であり、ぼくの故郷「東京」のような都会
は農山漁村に支えられていることをもつと自覚するべきなの
だと思う。そしてこの場所はもつと国民みんなの自分事で
あつていい。そんなことを感じてもらうために最初のアプ
ローチがこの都会の高校生に提供させていただく農村ホーム
ステイであり、そこでの気づきを学びに掘り下げることがいま
必要なのだと感じています。

【食の絆を育む会とは】

北海道の十勝地域18市町村約
500戸(平成26年現在)で大阪・
東京などの都会の高校生を受
入、ありのままの農村生活を
体験させる「農村ホームス
テイ」を展開。平成24年に、
各市町村の農林漁業者が所属
する11団体で、「NPO 法人食の
絆を育む会」を設立。貴重な
体験を一過性の思い出づくりに
留まらない学び(事後学習)
へとつなげる取組を学校と連
携しながら進めている。



**ふ
あ
れ
い**

家族のようなふれあいから新しい故郷がここ「十勝」に！ 温かい雰囲気、いっぱい時間を過ごしてください。



■ 体験を通して…生徒からの感想 ■



搾乳体験がとても新鮮でした。帰りに帰らなくなるくらいにすごく楽しい一日を過ごせました。



すごく優しく接してくれてうれしかったです。お母さんと一緒に作ったご飯はおいしくて、あの味は忘れません！

シチューやハチミツもとてもおいしかったです。そして何よりもあんなにぎやかであたたかい家族はとても憧れます。



**農
体
作
験
業**

広大な大地のもとで、土に触れ、作物に触れ、牛などの動物に触れて頂きます。心と体で感じてもらうこと、「発見」「気づき」「感動」がここでのキーワードです。



につぼん最大の穀倉地帯であり、酪農・畜産地域である北海道十勝の生産者宅において行う「農村ホームステイ」では、ありのままの農村生活を体験して頂いております。受入家庭でのまる1日の滞在では農作業体験だけではなく、温かい家族のようなふれあいから新たな「つながり」が芽生え始めています。いのちの糧を育む農山漁村をより身近に感じてもらいたい！それが受入家庭の方たちの願いです。

つながる！ 農村ホームステイ

深まる学び 事後学習

楽しかった「農村ホームステイ」。毎年8割を超える生徒たちが修学旅行中で一番の思い出と答えてくれています。そして「今までは身近になかった農山漁村・農林漁業での実体験を一過性のもので終わらせたなら勿体ない」、そんな学校の先生との話から学校に戻ってからの「事後学習」はスタートしました。現在は学校ごとのご要望にお答えし、農村ホームステイの振り返りを軸としたプログラムを担当される先生たちと一緒に考え、作らせて頂いております。内容は「食育」や「キャリア教育」への応用がその主流を占めています。

学校の授業で

受入農家より提供頂く、生徒へのビデオメッセージの上映、生活体験を振り返りワーク、生き方・職業感への学びにつながる出張講話やワークショップなどを実施。



家庭実習科

十勝よりお届けする食材（じゃがいも・たまねぎ・牛乳等）を活用しての家庭科実習では、ホームステイを思い出し、楽しみながら調理。「いただきます」の意味を体で吸収し、感じて頂いています。



香里丘高校 家庭科教諭 十河先生コメント



生徒達は大阪に帰ってからも修学旅行を通して、食べ物の大切さや、命の大切さについてしっかり考えることができているようです。今までも家庭科の授業の中でそういったことは教えているつもりだったんですが、やはり農家の皆様という様な体験をしたことが更にいい影響を与えてくれたのではないかと思います。

■事後学習を通して…生徒からの感想■

食べ物を作る人がいないと、自分たちは生きていけない。当たり前にある食べ物を当たり前と思っではならないと思いました。



ホームステイで農家さんの大変さを学び、事後学習の中のお話で**生きることの大切さ**を学びました。



北海道の農家さん達は、**私たちのために食べ物を作ってくれている**ことを忘れたいと思います。



先生から見た農村ホームステイ



平成 22 年度実施校
大阪府立市岡高校
山中先生

平成二十二年
秋に十勝のホー
ムステイでお世
話になりました
。「体験学習」
。「非日常」・「交流」

をキーワードに、大阪にいとすべが自分達で揃えることができてしまう万能感をもった大阪の高校生が今回の農村ホームステイを通じて、どのような変化があるのか、期待と不安が入り混じったスタートでした。

しかし、いざ始まってみると生徒の五感（視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚）をすべて刺激するものが十勝にあり、いつしか不安はどこかへ消えました。五感に関する具体的な感想として、次のようなことが生徒から挙げられました。視覚は「空気がきれい」、「星がきれいで夜は暗い」。聴覚は「風の音だけ聞ける」。嗅覚は「土や牛の匂いがする」。味覚は「野菜が甘い」、「水がおいしい」。そして触覚は「土、自然、そして人と触れ合う」といったものでした。

自分達が日頃口にしていているものが、どのようにつくられているかについて理解し、「生産者」と「消費者」という視点でつながるきっかけになったと思います。食の安全が叫ばれている中、交流した人たちが心をこめて作っているものに対し今までは違う視点で「食べ物」という意識が生まれたと思います。見ず知らずの誰かではなく、「十勝のAさんが作ったものだ！」もしくは「自分たちが行った十勝産だ！」という気持ちは食べ物を残さずに大切にしたいという気持ちにつながることでしよう。さらに「いただ

きます」の背景にある、命を「いただく」という感謝の気持ちを再認識することにもつながったのではないかと思います。

今、人の評価（目）を気にしながら、いわゆる空気を読むことに神経を分かっている生徒が多いうす。そのような生徒たちにとって、先入観をもたずに、そのままの自分を無条件で受け入れてくれる大人がいることはどれだけ癒されることでしょうか。飾らない素朴な人柄・温かい家庭の雰囲気少し固まっていた生徒の心身をとかして開放してくれました。中には幼い子どもがいるご家庭もあり、そこで頼られている自分がいて、自己に関して有用・効用感が持てる体験もありました。農村ホームステイ終了後、受け入れ家庭との別れ際の生徒たちの涙が何よりそのことを物語っていました。

今回の修学旅行を通じて担当者として、私は「バトンタッチ」という言葉を強く意識しました。「親子どもへ伝えること」、「教員が生徒へ伝えること」、「生産者が消費者へ伝えること」、「消費者が生産者へ伝えること」など、次の未来を担う世代へ向けて、あらゆる場面で伝えることがあります。今回の修学旅行で素晴らしい体験をした生徒が今後、自らの体験をもとに発信をしてくれることを期待します。



平成 23 年度実施校
大阪府立茨木高校
和田先生

宿泊野外行事
から数カ月が過ぎ
ましたが、生徒
たちの心の中
に今もあの農村
ホームステイの

経験が息づいていることを、彼らの言葉や行動の端々から感じております。例えば教室で親に作ってもらった弁当を食べながら「ぼくあれから『この野菜はだれが育てたんやろう』とか考えるようになったんです」と担任の私に語りかけてくれたりします。

「ぜひ全員で農村ホームステイを」と委員の生徒たちが呼び掛けたとき、都会育ちの生徒たちからは不安の声ばかりが聞こえてきました。見ず知らずの人の家には泊まったことがないとか農業、酪農あるいは漁業林業といった現場の作業が果たして務まるのかといったものでした。計画は具体化していったものの、その不安感は現地に到着し入村式に臨む時まで変わらなかったように思います。そして、私たち教員も少し心配しながら生徒たちを見送りました。

けれども翌日、帰ってきた彼らを見た瞬間、そんな心配は吹き飛びました。普段見ることがないような生き生きとした顔、顔、顔。退村式が終わっても別れを惜しんでなかなかバスに乗ろうとしない姿を見て農村ホームステイが実現できて本当によかったと実感した次第です。

農村ホームステイを通じて生徒たちに芽生えた「変化」がこれからの彼らの生き方にどんな影響を与えていくのかこの先も見守っていきたいと思っています。そして学校として今後できることを模索したいと考えています。

にっぽんの未来に向けて必要なこと。
それは、都市と農山漁村の更なる信頼関係。

そしてその最初の一歩が
農村ホームステイであり
その次の一歩が
事後学習であると考えています。

次の世代にきちんとバトンを渡すために、
ここ十勝から学校の先生と一緒に考えながら
一歩ずつ進んでいきたいと思ひます。

十勝に来てください！
そして感じてください！！

